

論 説

2003年北アイルランド地方議会選挙に関する一考察 岐路に立つ「ベルファスト和平合意」

南 野 泰 義

目 次

- [1] はじめに
- [2] 地方議会選挙の概要
- [3] 地方議会選挙各選挙区の動向
- [4] 選挙結果の特徴
- [5] 地方政府再開への課題
- [6] まとめに代えて

[1] はじめに

北アイルランド問題は、1998年4月、「ベルファスト和平合意」Agreement reached in the multi-party negotiations（以下、「和平合意」）が締結され、権力分有型の地方政府と議会の設置が進められることになった¹⁾。しかし、民主ユニオニスト党（DUP）など、「和平合意」反対派ユニオニストは、アイルランド共和軍（IRA）の武装解除問題を争点に、IRAによる武装解除の実行が先行的に行われることがない限り、地方政府からの離脱も辞さないとする強硬な姿勢を示してきた。そのため、地方政府および議会は、幾度となく一時的停止措置が取られることになった。そして、2001年9月以降、プロテスタント系ロイヤリストの武装組織がそれまでの停戦を破棄し武装闘争を再開するなど、準軍事組織の政治的暴力が激化する状況にある。

英国北アイルランド相ジョン・リードは2002年5月1日、IRAが4月8日に出した第2次武装解除実施の声明を受ける形で、IRAの停戦は十分なものでなく、戦争が終わったという感覚が必要であるという声明を発表し、IRAに完全な武装解除の実施を迫る姿勢を示した。しかしながら、IRAの武装解除をめぐる議論はロイヤリストの武力闘争の強化とあいまって、暗礁

に乗り上げる結果となった。そして、2002年10月14日、リードは第1回地方選挙以後、4度目となる地方政府および議会の無期限停止に踏み切ったのである。以降、北アイルランドは、英国政府の直接統治下に置かれ、2003年5月に予定されていた第2回地方議会選挙も延期されたのである。

こうした状況の中で、2003年10月19日、シン・フェイン党(SF)、アルスター・ユニオニスト党(UUP)、英国政府、アイルランド共和国政府による地方政府再開に向けた協議が断続的に行われた。その結果として、10月21日、英国政府は地方政府再開にあたって、11月26日にこれまで延期されていた第2回地方議会選挙を実施する声明を発した²⁾。SFのジェリー・アダムズはこの決定を評価する声明を発し³⁾、これを受けて、IRAは同日、地方議会選挙実施を評価するとともに、第3次の武装解除を実施したことを明らかにしたのである⁴⁾。

本稿では、2003年地方選挙を通じて明らかになった北アイルランドにおける政治地図の変容とその意味について考察することを目的とする。

[2] 地方議会選挙の概要

2003年11月26日、北アイルランド地方議会選挙は実施された。この選挙では、北アイルランドでの地方自治体選挙およびアイルランド共和国で実施されている単記移譲式比例代表制(以下、PR-STV)が採用され、英国総選挙と同じ北アイルランド18選挙区で、全108議席が争われた。

1998年の「和平合意」は、「権力分有」による地方政府の設置を基本課題としていた。それゆえ、「多数派と少数派の間の“権力の共有”、“権力の拡散”、“権力の公正な配分”」を保障するシステムを採用することに主眼が置かれていた。つまり、それは、北アイルランドのように分裂した社会において、選挙を通じて、カトリックとプロテスタントの両コミュニティの対立が顕在化する危険性を回避し、コミュニティ横断的な代表を選出することを重要視していたからにほかならないのである⁵⁾。

北アイルランドにおけるPR-STVの場合、有権者がそれぞれ最も好ましいと考える候補者に1位、その次に好ましいと考える候補者は2位と、1位から2位までの順位をつけて投票することになる。そして、当該する選挙区の有効投票数との関係であらかじめ算出された当選基数に達するまで第2位票の移譲を繰り返し、当選基数を上回った候補者を当選とする仕組みである⁶⁾。

2003年11月26日に実施された第2回北アイルランド地方議会選挙では、主に、アルスター・ユニオニスト党(UUP)、民主ユニオニスト党(DUP)、進歩ユニオニスト党(PUP)、北アイルランド・ユニオニスト党(NIUP)、連合王国ユニオニスト党(UKUP)、ユニオニスト連合(UUC)などのユニオニスト政党、連合党(APNI)や北アイルランド女性連合党

(NIWC)などのコミュニティ横断的なユニオニスト系諸派、そして社会民主労働党(SDLP)、シン・フェイン党(SF)のナショナリスト政党が各選挙区に候補者を擁立し、その他、労働者党(WP)、労働党(Lab)、緑の党(Green)社会党(Soc)、社会主義環境連合(SEA)、「あなたのための投票」(VFYP)、アルスター「第3の道」(UTW)、ユニオニスト系ないしはコミュニティ横断的な無所属候補者などが立候補していた。

かかる選挙の投票率は63.05%であり、前回の地方議会選挙を5ポイントあまり下回る結果となった。これは、1973年の北アイルランド地方自治体選挙を下回る数字であり、1969年に降過去最低であった。それには理由があった。今回の選挙が10月23日に告示され、一ヶ月あまりの準備期間で投票に入るというタイトなスケジュールの中で行われたことから、選挙管理委員会が職権で選挙人名簿を作成するという形をとっていない英国では、選挙人登録が前回選挙の水準に達しないまま投票に突入するという事態が発生した。

このことは、今回の選挙の実施にあたって、新しい選挙違反防止法が英国で初めて適用されたことにその原因があった。この法律は、郵便投票の乱用を防止することと選挙人の個人認証を強化することを目的としていた。従来選挙人登録では、各世帯単位に登録用紙が配布され、それぞれ世帯単位で自主的に資格要件を満たした個人の名前をまとめて書き込む形をとっていた。しかし、新しい法律のもとでは、選挙人資格者が毎年、それぞれ登録用紙に記入し、写真入りの認証カードを作成しなければならないというものであった⁷⁾。このことは、国勢調査の結果をできるだけ正確に選挙人登録に反映させることを期待するものであった。しかし、他方で、個人情報の詳細に記入しなければならないという点で、選挙人資格者の疑念を引き起こしていた言われている⁸⁾。

北アイルランド選挙管理委員会のレポートによると、告示時点で、約17万人ないしは18万人が選挙人未登録者となり、選挙人登録した者のうち3万6000人が写真入りの認証カードを持たないことから投票できないという予想が示されたのである。これは、登録可能な選挙人の13%が投票できないことを意味していた。そこで、北アイルランド選挙管理委員会は特別の登録証の発行に踏み切り、また運転免許証、EUパスポート、北アイルランド交通局の定期券を所持していれば投票を可能とする緊急措置をとり、問題に対処しようとした。それでも、投票日前日の時点で、約3万人が投票に必要な証明書を持っておらず、投票が困難という状況であった⁹⁾。こうした要素が作用して、選挙人登録者数は前回の地方議会選挙での117万8556人を8万1030人下回る109万7526人となった。投票数も69万2028票と前回選挙(82万4391票)を13万2363票下回る結果となったのである。

今回の地方議会選挙で注目すべき点は、「和平合意」反対派のDUPが地方議会第1党に踊り出たことと同時に、「和平合意」支持派の中で最高得票数を獲得したSFがカトリック系政党第1党となったことである。そして、DUPがユニオニスト第1党となったことは、1992年以降、

北アイルランドで実施された各種選挙において初めてのことであった。表1を見ると、北アイルランド和平に直接関係する選挙において、DUPは相対的に高い得票率を獲得していた。さらに、ユニオニスト内部の対立が厳しくなる2000年以降は、各種選挙において20%代の得票を獲得しており、議席数でも2001年の英国総選挙では、1997年英国総選挙の2議席から5議席とし、ユニオニスト最大政党とされるUUPの6議席に迫る党勢の拡大を獲得していた¹⁰⁾。また、英国総選挙と同日選挙となった地方自治体選挙でも、1997年の前回選挙より31議席減のUUPに対して、DUPは前回の91議席から40議席増の131議席へと躍進していたのである¹¹⁾。

(表1) 北アイルランド各種選挙における各政党の得票率(1992年以降)

政党	1992年	1993年	1996年	1997年	1997年	1998年	2001年	2001年	2003年
	英国総選挙	地方自治体選挙	円卓会議選挙	英国総選挙	地方自治体選挙	第1回地方議会選挙	英国総選挙	地方自治体選挙	第2回地方議会選挙
UUP	34.5	29.4	24.2	32.7	27.8	21.3	26.8	23.0	22.7
SDLP	23.5	22.0	21.4	24.1	20.7	22.0	21.0	19.4	17.0
DUP	13.1	17.3	18.8	13.6	15.6	18.1	22.5	21.5	25.7
SF	10.0	12.4	15.5	16.1	16.9	17.6	21.7	20.6	23.5
AP	8.7	7.6	6.5	8.0	6.6	6.5	3.6	2.1	3.7
UKUP	-	-	3.7	1.6	0.5	4.5	1.7	0.6	0.8
PUP	-	-	3.5	1.4	2.2	2.5	0.6	1.5	1.2
NIWC	-	-	1.0	-	0.5	1.6	0.4	0.2	0.8

(出典) CAIN Web Service : Results of Elections and Referenda
 (<http://cain.ulst.ac.uk/issues/politics/election/>) より作成。

他方で、今回の地方議会選挙でナショナリスト第1党となったSFは2001年の英国総選挙の段階で、ナショナリスト最大政党とされてきた社会民主労働党に代わり、2議席増の4議席を獲得して、ナショナリスト第1党の地位を獲得していた。SFの場合、とくに注目すべきは、ベルファスト北選挙区である。ここは、1983年の英国総選挙以来、ユニオニストが議席を独占していた選挙区である。しかし、1998年の地方議会選挙では、第1位順位票だけを見ると、8,764票を獲得したDUPに対して、わずか11票差ではあるがSFが第1党となっていた。つまり、1998年の地方議会選挙の結果から見て、英国総選挙では、4議席は獲得できる党勢をすでに築いていたと考えられるのである¹²⁾。

2001年英国総選挙でSFが獲得した議席は、ベルファスト西選挙区、ミッド・アルスター選挙区、西ティーロン選挙区、ファーマナー/南ティーロン選挙区であった。注目されたベルフ

アスト北選挙区では、ジェリー・ケリー候補が25.6%と1998年地方議会選挙での得票をほぼまとめ切ったものの、「和平台意」反対派のDUPのナイジェル・ドゥズに6,000票あまりの差をつけられ次点に終わっている。これには、UUPの現職で穏健派のセシル・ウォーカー候補の基礎票が大幅にドゥズ候補に流れたことが影響していた。つまり1997年の英国総選挙には候補者を立てなかったDUPが40%あまりの得票率を獲得する一方で、ウォーカー候補は12%と前回総選挙時の52%から40ポイント得票率を下げていることから、従来UUPが獲得してきた支持票がほぼDUPに流れたと考えられているのである¹³⁾。

このように、1998年以降、DUPとSFが党勢を着実に拡大させている中で、今回の第2回地方議会選挙が行われた点をまず留意しておく必要がある。

（表2）2003年北アイルランド地方議会選挙結果

政 党 名	政党略称	獲得議席数	増 減	第1位順位 得 票 数	第1位順位 得 票 率	増減 (%)
民主ユニオニスト党	DUP	30	10	177,944	25.71	7.70
シン・フェイン党	SF	24	6	162,758	23.52	5.89
アルスターユニオニスト党	UUP	27	- 1	156,931	22.68	1.43
社会民主労働党	SDLP	18	- 6	117,547	16.99	- 4.97
連合党	APNI	6	1	25,372	3.67	- 2.83
無所属	Ind.	1	1	19,256	2.78	-
進歩的ユニオニスト党	PUP	1	- 1	8,032	1.16	- 1.39
北アイルランド女性連合	NIWC	0	- 2	5,785	0.84	- 0.77
連合王国ユニオニスト党	UKUP	1	- 4	5,700	0.82	- 3.69
無所属ユニオニスト	Ind.U	0	- 5	5,387	0.78	-
連合ユニオニスト党	UUC	0	0	2,705	0.39	-
緑の党	GP	0	0	2,688	0.39	0.30
社会主義環境連合	SEA	0	0	2,394	0.35	-
保守党	Con	0	0	1,604	0.23	0.03
労働者党	WP	0	0	1,407	0.20	- 0.04
北アイルランド・ユニオニスト党	NIUP	0	0	1,350	0.20	-
無所属ナショナリスト	Ind.N	0	0	1,121	0.16	-
社会主義党	Soc	0	0	343	0.05	-
無所属（労働党支持）	Ind.L	0	0	162	0.02	-
「あなた自身のための投票」	VFYP	0	0	124	0.02	-
アルスター「第三の道」	UTW	0	0	16	0	-

選挙人登録者数：1,097,526 有効投票数：692,028 投票率(%)：63.05

（出典）The Electoral Commission web-site, Election data : Northern Ireland Assembly elections - results, (<http://www.electoralcommission.org.uk/election-data/>), CAIN Web Service : Results of Elections and Referenda (<http://cain.ulst.ac.uk/issues/politics/election/>) より作成。

今回の地方議会選挙の結果は、表2が示しているように、DUPが第1位順位票得票率、議席数とも第1党となり、30議席を獲得することになった。第2党にはUUPが入り、27議席。また、SFは第1位順位票得票率ではDUPに次ぐ第2党であったものの、議席獲得数では第3党の24議席であった。1998年の地方議会選挙でUUPに次いで第2党となった社会民主労働党が第1位票得票率でマイナス4.97ポイントと候補者を擁立した政党の中で最も大幅な後退を示し、議席数では6議席減の18議席となった。

そして、UUPとの連携を強めていたPUPが前回の2議席から1議席へ後退し、連合王国ユニオニスト党は4議席減の1議席、無所属が1議席であった。中間政党と考えられてきた諸政党を見ると、ユニオニスト系のコミュニティ横断的な立場をとる連合党は現有の6議席を維持したものの、前回の地方議会選挙で議席を獲得した北アイルランド女性連合NIWCはすべての議席を失う結果となった。

この結果からみると、数字の上では、「和合合意」支持派のUUPとPUP、そして社会民主労働党、連合党、北アイルランド女性連合の後退が顕著である。しかし、表3によると、後退傾向はみられるものの、今回の地方議会108議席のうち76議席が「和合合意」支持派の諸政党によって占められており、「和合合意」反対派は32議席にとどまっている点を確認しておく必要がある。また、地方議会における議席占有率から見ても、「和合合意」支持派の諸政党が依然として70%を示しており、反対派諸政党は29%にとどまっている。だが、得票率で見ると、「和合合意」支持派は68.85%であり、前回選挙より2.63ポイント、そして「和合合意」の是非をめ

(表3) 主要諸政党に見る「和合合意」支持派 / 反対派の勢力分布

	政 党 名	政 党 略 称	獲得議席数	増 減	第1位順位 位 得 票	第1位順位 得 票 率	増減 (%)
「和合合意」 支持派	シン・フェイン党	SF	24	6	162,758	23.52	5.89
	アルスターユニオニスト党	UUP	27	-1	156,931	22.68	1.43
	社会民主労働党	SDLP	18	0	117,547	16.98	-4.97
	連 合 党	APNI	6	1	25,372	3.68	-2.82
	進歩的ユニオニスト党	PUP	1	-2	8,032	1.16	-1.39
	北アイルランド女性連合	NIWC	0	-4	5,785	0.83	-0.77
	小 計		76	0	476,425	68.85	-2.63
「和合合意」 反対派	民主ユニオニスト党	DUP	30	10	177,944	27.71	7.49
	連合王国ユニオニスト党	UKUP	1	0	5,700	0.82	-3.69
	無所属ユニオニスト	Ind.U	1	-1	19,256	2.79	2.22
	連合ユニオニスト党	UUC	0	0	2,705	0.39	0.39
	北アイルランドユニオニスト党	NIUP	0	0	1,350	0.19	0.19
	小 計		32	9	206,955	31.9	6.6

(出典)〔表2〕より作成。

ぐる国民投票において「和平合意」支持派が獲得した71%を3ポイント程度の後退を示したのである。

[3] 地方議会選挙各選挙区の動向

ここで、18の各選挙区の状況について見てみることにしよう¹⁴⁾。

[アントリム東選挙区]

まず、アントリム東選挙区は、ラーンとキャリックファーガスのディストリクト・カウンシルを含む地域である。今回の選挙時点では、カトリック系住民が13.31%に対して、プロテスタント系住民が66.69%を占め、とくにプロスピテリアン教会に所属するプロテスタントが32.93%と北アイルランド全体でも三番目に高い比率を示していた。そして、今次選挙におけるコミュニティを基礎にした支持票は、カトリック系が15.57%を組織していたのに対して、プロテスタント系が79.17%を組織していたと考えられている。

今回の選挙では、DUPが2議席増の3議席を獲得し、UUP（2議席）と連合党（1議席）はそれぞれ現有議席が維持する結果になった。この選挙区では、1998年の地方選挙で、DUPは22.2%の第1順位票を獲得していたが、2001年の英国総選挙では36.0%を獲得し、128票差でUUP候補者に敗れている。今回の選挙では、34.1%の第1順位票を獲得し、さらに第2位順位票を前回当選したUKUPのロジャー・ハッチンソンから移譲され、三名を当選させることができた。ハッチンソンは1999年1月、同党の三名の地方議会メンバーとともに離党し、NIUPを結成したが、2000年11月にはDUPに参加していた。しかし、今回は無所属での立候補であった。結果的には、DUPのジョージ・ドーソンとデビッド・ヒルディッチは第12回集計において、ハッチンソンの第2位順位票から60%あまりの票が移譲されることにより、第13回集計で当選を確定的なものにしたのである。

[アントリム北選挙区]

この選挙区は、バリーメナ、バリーマニー、モイルの3つのディストリクト・カウンシルから構成されている。そして、カトリック系住民が27.68%に対して、プロテスタント系住民が60.14%であり、特にプロスピテリアン教会に所属するプロテスタントが38.51%と北アイルランドで最も高い比率を示しているところである。また、今次選挙のコミュニティを基礎にした支持票ではカトリック系が30.47%を組織していたのに対して、プロテスタント系が67.67%を組織していたと考えられている。とくに、DUPの創設者で自由プロスピテリアン教会の指導者もあるイアン・ペイズリー師とその息子のイアン・ペイズリー・ジュニアの支持基盤となる選挙区である。1998年の地方議会選挙でもDUPは第1位順位票を37.6%獲得し、DUPが北アイルランドの選挙区の中で最も高い得票率を得ていたし、2001年の英国総選挙でも、イアン・

ペイズリー師が49.9%と北アイルランドで最も高い得票率を獲得していた。

今回の選挙で、DUPは第1位順位票で45.9%の得票率をあげており、これは前回より8.3%増ということになる。その結果、DUPは3議席、UUPは1議席、SFが1議席、社会民主労働党が1議席と「和平方意」支持派と反対派が拮抗する形となった。とくに、UUPのジェームズ・カリーは第5回集計で、PUPビル・マッカーシーの第2順位票から26%、第6回集計で同じUUPのロバート・コールターの第2順位票から5%足らずの移譲しか受けられず、最終の第9回集計では、社会民主労働党のショーン・ファーレンに930票差をつけられ落選している。

[アントリム南選挙区]

アントリム南選挙区は、アントリム・ディストリクト・カウンシルとニュートンアビー・ディストリクト・カウンシルの一部から構成されており、カトリック系住民が26.84%であるのに対して、プロテスタント系住民は55.58%を占め、中でもプロスピテリアン教会に所属するプロテスタントが30.18%と北アイルランドで5番目高い比率を示しているところである。また、今次選挙のコミュニティを基礎にした支持票では、カトリック系が29.71%を組織していたのに対して、プロテスタント系は65.98%を組織していたと見られている。

今回の選挙では、DUPが2議席、UUPが2議席、社会民主労働党が1議席と、ここでも「和平方意」支持派と反対派が伯仲する結果となった。前回の選挙では、UUPが第1位順位票を29.95%獲得し、2議席を確保していた。また2001年の英国総選挙では37.1%の得票をしたUUPのデビッド・バーンサイドが当選し、同じ日に行われた地方自治体選挙でもUUPは33%の得票率をあげていた。従来、この選挙は、UUPが30%台の得票率を安定的に獲得してきたところであり、今回の選挙でも29.8%を得て、現有議席を維持していた。他方で、DUPは10%以上得票率を上げることに成功し、1議席増と党勢を拡大した。その背景には、PUPや社会民主労働党が2~3%あまり得票率を下げたこととあいまって、前回の選挙に候補者を立てた連合王国ユニオニスト党が候補者の擁立を行わず、DUP支持に回ったことが上げられる。また、DUPの2候補も、第5回集計において、連合党のノーマン・ボイドの第2位順位票から50%あまりの移譲を受けたことにより、ウイルソン・クランドが第5回集計で、ホール・ガーバンが第6回集計でそれぞれ当選することができたのである。

[ベルファスト東選挙区]

ベルファスト東地区は、ベルファストシティー・カウンシルの東地区とキャスルレー・ディストリクト・カウンシルから構成されており、18選挙区の中で最も人口の少なく、平均年齢も40歳と最も高い選挙区であることから、これまで保守的な地区と考えられてきた。

この選挙区は、DUPの指導者の一人であるピーター・ロビンソン、UUPのサー・レグ・エンピー、PUPの党首デビット・アーバインなど、大物政治家の地盤である。とくに、DUP

は30%以上の得票を安定的に獲得してきた選挙区であり、今回の選挙でも、DUPは39.2%を獲得、ピーター・ロビンソンを第1回集計、ロビン・ニュートンを第3回集計で当選させ、現有2議席を維持している。また、UUPは、唯一前回選挙より得票率を伸ばし、サー・レック・エンピーを第1回集計で当選させた。エンピーは、これまで「和平合意」支持の姿勢を示しつつも慎重な態度をとっており、また2001年7月1日から地方政府が一時停止された8月11日まで第1首相を勤めるなど、ポスト・トリンプルと目されている人物である。しかし、第2回集計以降の移譲票を思うように獲得することができず、第1回集計で5位につけていたマイケル・コーブランドが最終の第6回集計において、DUPのヘイリー・トーアンの第2位順位票から350票あまりを移譲され6議席目に滑りこんだ。その他、PUPのデビット・アーバイン、連合党のナオミ・ロングがそれぞれ第6回集計で当選を決めている。

この選挙区では、カトリック系住民が7.49%と18選挙区の中で最も低い比率を示しており、プロテスタント系住民が71.62%を占めている。とくに、ここでは、国教会系のアイルランド教会に所属するプロテスタントが21.79%と18選挙区中4番目に高い比率を示している。このことは、アイルランド教会の支持を背景に持つUUPに有利な選挙区ということになる。他方で、プロスピテリアン教会に所属するプロテスタントは29.98%であった。さらに、今次選挙のコミュニティを基礎にした支持票では、カトリック系が9.86%を組織していたのに対して、プロテスタント系は84.62%を組織していたと考えられている。それゆえ、プロテスタントの各宗派の構成比率が、ほぼ基礎票としてUUPとDUPの得票となっていると言える。

[ベルファスト北選挙区]

この選挙区は、ベルファストシティー・カウンシルの北地区とニュートンアビー・ディストリクト・カウンシルの一部から構成されている。今回の選挙では、DUPが2議席、UUPが1議席、そしてSFが2議席と社会民主労働党が1議席を獲得し、プロテスタント系ならびにカトリック系政党が6議席を分け合う形となった。ここでも、DUPは第1順位票の得票率が34.2%と前回より12.9%の増勢を示していた。また、DUPが前回より12.9%増の34.2%と得票率を伸ばしたのと対照的に、UUPが1.5%得票を減らし、第10回集計でやっとフレッド・コーバインを当選させたのである。PUPにいたっては4.8%も得票を減らすことになり、PUPは指導者の一人であるピリー・ハッチンソンを落選させる結果となった。

SFは、党の中心メンバーであるジェリー・ケリーを第1回集計で当選させたあと、ケリーの移譲票が社会民主労働党とUUPに割れたこともあり、最終の第12回集計で社会民主労働党のパット・コンベリーの移譲票を700票あまり獲得し、キャシー・スタントンを滑りこませることに成功した。しかし、社会民主労働党はアーバン・マギネスが第1回集計で3位につけていたにもかかわらず、北アイルランド女性連合や連合党などのコミュニティ横断的政党からの移譲票を得ることができず、第12回集計で同党のコンベリーからの移譲票によって当選を決

めるという状況であった。

この選挙区は、カトリック系住民が40.53%を占めており、一方、プロテスタント系住民は43.90%と両派の比率が拮抗する地区である。それゆえ、コミュニティ間の対立も厳しく、2001年にはプロテスタント系ロイヤリスト過激派によるホーリークロス女子小学校周辺での暴力事件などが発生している。それゆえ、コミュニティ内の結束は両派とも強いと考えられてきた。今次選挙のコミュニティを基礎にした支持票では、カトリック系が44.93%、プロテスタント系は51.86%を組織していたと見られている。このことは、移譲票の行方にも影響を与えたと考えられる。実際、移譲票の流れはカトリック系政党か、プロテスタント系政党かのいずれかに偏る傾向を示しており、両派コミュニティ間の対立関係を反映する形となっている。

[ベルファスト南選挙区]

この選挙区は、ベルファストシティー・カウンシルの南地区とキャスルレー・ディストリクト・カウンシルの一部から構成されており、カトリック系住民が35.63%を占め、これに対してプロテスタント系住民は42.46%と近年、この比率が接近している地域である。また、今回の選挙において、コミュニティを基礎にした支持票は、カトリック系が41.36%、プロテスタント系は52.03%を組織していたと見られている。

ここでは、UUPの「和平合意」反対派のマーチン・スミスが1982年以来、英国下院の議席を保持している。今回の選挙の結果は、DUPが2議席、UUPが2議席、SFが1議席、社会民主労働党が1議席となっている。開票状況を見ると、UUPのマイケル・マクギンプシーを除いて、その他の当選者はすべて第11回集計ないしは第12回集計での当選であり、当選基数に到達する者はいなかった。また、前回の選挙で、議席を獲得した北アイルランド女性連合は社会民主労働党のマクドナルドに127票及ばず、議席を失っている。この選挙区の特徴は、第2位順位の移譲票が各候補者に分散しており、各政党が投票を十分に組織することができなかった点にある。それは、同じ政党間を除いて、ユニオニスト政党間での票の委譲がうまくいかなかった点で、ユニオニスト内部の「和平合意」支持派と反対派の対立が強く作用していたと言える。

[ベルファスト西地区]

この選挙区は、ベルファストシティー・カウンシルの西地区とリズバーン・ディストリクト・カウンシルのツインブロック地区とポールグラス地区から構成されており、SFの最大の票田である。今回の選挙でも65.00%と前回より6%以上得票率を伸ばし、4議席を獲得している。この選挙区は、カトリック系住民がほぼ90%を占めるフォールス街、ツインブロック地区、ポールグラス地区とプロテスタント系がほぼ99%を占めるシャンキル街が隣接する地域である。カトリック系住民は76.33%を占め、18選挙の中でも最も高い比率を示している。また、プロテスタント系住民は13.32%とこちらは18選挙区中最も低い比率を示していた。こ

のことは、コミュニティを基礎にした支持票にも反映しており、今回の選挙では、カトリック系が82.68%を組織して、主にSF候補者への投票を呼びかけていたのである。このことは、SF候補者から社会民主労働党候補に第2位順位票が移譲されにくい構造を生み出していた。それゆえ、社会民主労働党から唯一当選したアレックス・アットウッドは、同党のジョー・ヘンドロンが落選し、その移譲票によって当選を確実にするという状況にあった。

逆に、ロイヤリスト系過激派の内部対立など、プロテスタント系コミュニティ内部の凝集力が弱まっていることを反映して、今次選挙でのコミュニティを基礎にした支持票は16.22%にとどまっていた。しかしながら、この選挙区でのプロテスタント系コミュニティの投票行動を見ると、シャンキル街を中心にして、「和平合意」反対の根強い気分・感情が存在しており、「和平合意」反対を明確に示したDUPが前回選挙より4.5%得票率を伸ばし、またUUPのクリス・マクギンブシーとPUPのヒュー・スミスからの移譲票を取りまとめて、1議席を獲得することに成功したのである。

[東ロンドンデリー選挙区]

この選挙区は、コールレーンとリマヴァディーの2つのディストリクト・カウンシルのから構成されている。宗派別の比率では、カトリック系住民が34.74%であり、プロテスタント系住民は51.57%となっている。そして、今回の選挙で、コミュニティを基礎にした支持票について見ると、カトリック系が37.94%、プロテスタント系は59.23%を組織していた。ここでは、DUPとUUPがそれぞれ2議席、SFとSDLPがそれぞれ1議席を獲得したが、DUPとSFはともに8%以上得票率を伸ばし、その躍進が目立った。ここでは、1996年の円卓会議選挙以降だけを見ても、UUPが30%以上の得票率を獲得しており、1998年の地方議会選挙時点で「和平合意」支持派として25.21%の得票率で第1党の地位にあった。また、1997年の英国総選挙ではUUPのウィリアム・ロスが英国総選挙で議席を獲得していた。しかし、2001年の総選挙で、DUPのグレゴリー・キャンベルに議席を奪われて以来、「和平合意」反対派が支持を拡大している選挙区である。

[ファーマナー／南ティエロン選挙区]

ここは、ファーマナー・ディストリクト・カウンシルとダンガノン・ディストリクト・カウンシルの大部分を含む選挙区であり、2001年英国総選挙では、SFのマイケル・ギルダニューウが議席を獲得している。さらに、2001年の地方自治体選挙でも第1党となっている。両宗派の比率は、カトリック系住民が52.31%、プロテスタント系住民は39.20%を占めている。とくに、80年代以降、カトリック系住民の比率が高まってきており、カトリック系政党には有利な地域とされている。また、今回の選挙におけるコミュニティを基礎にした支持票の組織状況は、カトリック系が55.58%、プロテスタント系は43.05%を組織していた。

この選挙区は、1997年までは、UUPが第1党としての地位を維持していたが、1998年の地

方議会選挙を契機に、SFが躍進し、第1党の地位を獲得するにいたっている。今回の選挙でも、SFは7.5%増の34.4%の得票率を得て、現有2議席を維持した。他方で、SDLPは現有1議席を守ったものの5.3%と大幅に得票率を減らす結果となった。

[フォイル選挙区]

フォイル選挙区は、デリー市を含むデリー・ディストリクト・カウンシルの行政単位と重なっており、カトリック系住民が多数派を占める地域である。これまでは、SDLPのジョン・ヒュームの地盤となる選挙区であった。2001年英国総選挙では、ヒュームは50.2%の得票率を獲得し当選を果たしている。今回の選挙では、SDLPが36.1%を獲得し、現有3議席を確保している。そして、SFが32.4%の得票率で2議席、DUPが15.0%で1議席を獲得し、改選前と同じ組み合わせとなった。しかし、SDLPは現有議席を維持したとはいえ、その低落傾向は同党の最大票田にも顕著に現れていた。前回の地方議会選挙と比較として、得票率で11.7%の減少を示し、第1位順位得票数でも1万票近くを減らしたのである。とくに、SDLPの党首に就任したマーク・ダーカンは第1位順位票で、6,806票と前回選挙時より2,000票上回っただけであり、前回ヒュームが獲得した12,581票を引き継ぐことができなかつたのである。しかも、その他のSDLPの候補者も前回に比べて得票数を減らしており、むしろ、前回ヒュームに投じられた票はSFに流れたと考えられるのである。

この選挙区は、カトリック系住民が70.89%であり、プロテスタント系住民は20.75%と圧倒的にカトリック系住民が多数派を占めている地域である。今次選挙におけるコミュニティを基礎にした支持票の組織状況は、クレガン地区、ボクサイド地区などを中心にカトリック系が75.37%、プロテスタント系は23.20%を組織していた。このように圧倒的にカトリック系コミュニティの支持が組織されているにもかかわらず、SDLPの低落傾向が急速に進んだ背景として、ヒュームの事実上の引退後、その影響力の低下とともに、カトリック系コミュニティ内におけるSFの指導力の拡大を見て取ることができる。

[ラガンバレー選挙区]

この選挙区は、リズバーンとバンブリッジという2つのディストリクト・カウンシルを含み、UUP党内で「和合意」反対派を束ねるジェフリー・ドナルドソンが地盤とする地域である。ここでは、UUPが3議席と北アイルランド18選挙区の中で、最も多くの議席を獲得した。そして、DUP、SDLP、APNIがそれぞれ1議席を獲得している。この選挙区の特徴として、UUPが前回選挙に立候補し当選したUKUPのパトリック・ローチェの支持票を取りまとめ、15.4%得票率を伸ばして1議席増に成功したことである。また、ドナルドソンとともに、UUP党内で「和合意」反対の姿勢を強めているノラ・ベアーも、同党のジム・カークパトリックとSDLPのパトリック・ローズリーの移譲票を受けて、DUPのアンドリュー・ハンターと接戦の末、最終の第10回集計で当選を果たしている。

ここでは、UUPの有力候補者とDUP候補者がともに「和平合意」反対の立場にあった中で、UUP候補者に票が集中するという傾向を示していた。この背景として、この選挙区では、カトリック系住民が18.16%を占める一方、プロテスタント系住民が65.45%と高い比率を示しており、しかも、UUPとの関係が深いアイルランド教会に所属する住民が24.54%と北アイルランドで2番目に多いという条件にあったことが指摘できる。また、コミュニティを基礎にした支持票の組織状況を見ても、カトリック系が20.62%であったのに対して、プロテスタント系はアイルランド教会を中心にして75.02%を組織していたのである。

〔ミッド・アルスター選挙区〕

この選挙区は、英国駐留軍基地が存在するマガラフェルト、クックストーンの両ディストリクト・カウンシルとダンガノン・ディストリクト・カウンシルのコーリスアイルランド地区を含んでおり、カトリック系住民が62.53%、プロテスタント系住民が31.03%という比率を示している地域である。また、今次選挙のコミュニティを基礎にした支持票の組織状況では、カトリック系が56.26%、プロテスタント系は33.73%を組織していた。

ここは、1997年と2001年の地方自治体選挙では、SFが40%台の得票率を獲得して第1党となっている地域である。今回の選挙では、SFが3議席、DUP、SDLP、UUPがそれぞれ1議席であり、各政党とも現有議席を維持した。この選挙区は、1995年まで、DUPのウィリアム・マクレアーが地盤とする地域であった。1995年の選挙区の区割り改定で、選挙区はそれまでの30%程度にまで縮小されることになった。この結果、マクレアは、かれの支持母体となっていたオールド・ファーマナー、南ティーロン、東ロンドンデリーの一部の地区を失うことになった。そして、この選挙区の区割り改定の後に実施された英国総選挙で、SFのマーチン・マクギネスが初当選し、カトリック系コミュニティの強い支持を背景に、以後SFが各種の選挙で安定的に第1党の位置についているのである。

〔ニューリー／アーマー選挙区〕

この選挙区は、アーマー・ディストリクト・カウンシルとニューリー／モーン・ディストリクト・カウンシルの西部を含む地域であり、1986年の英国下院補欠選挙でUUPのジム・ニコルソンをSDLPのシーマス・マローンが破って当選して以来、かれの地盤とされてきた。今回の選挙では、SFが39.8%の得票率で、1議席増の3議席を獲得している。これに対して、DUPとUUPはそれぞれ現有の1議席を維持したが、SDLPは1議席減という結果となった。とくに、SDLPは得票率を前回から10.4%下げ、また議席を確保した2001年英国総選挙から1万票近く減少させたのである。これは、シーマス・マローンの不出馬を受けて、フォイル選挙区と同様に、SDLPの影響力の低下を受けて、同党が失った票のほぼ50%がSFに流れたためであった。

この選挙区は、62.82%がカトリック系住民で占められており、一方プロテスタント系住民

の占める割合は28.65%である。そして、コミュニティを基礎にした支持票の組織状況でも、プロテスタント系が31.83%を組織していたのに対して、カトリック系は67.16%と18選挙区の中でも4番目に高い組織率を示していた。この地域もアイルランド共和国国境に近い南部アーマーを中心にカトリック系住民の比率が高まっており、ここ30年間で言えば、急速にカトリック系人口が増加しており、そうしたカトリック系のコミュニティの多くがSF系の大衆組織の影響下にあると見られている。このことが、SFの安定的な得票につながっていると考えられるのである。

[北ダウン選挙区]

北ダウン選挙区は、北ダウン・ティストリクト・カウンシル、アード・ディストリクト・カウンシルのドナガビー地区を含む地域である。ここでは、2001年の英国総選挙で、UUPのシルビア・ハーモンが1995年の補欠選挙で当選したUKUPのボブ・マッカーシーを破って当選している。だが、1970年代のアルスター人民ユニオニスト党のジェームズ・キルフェダー以来、保守的なユニオニストが強い影響力を保持してきた選挙区でもある。

今回の選挙では、第13回集計および第14回集計までもつれる接戦となった。UUPは最終的に1議席減の2議席を確保したものの、ダイアナ・ピーコックが最終の第14回集計において、アイリー・ベルの移譲票を取りこめず、421票差でDUPのアレックス・イーストンにせり負け、3つ目の議席を守ることができなかった。一方で、これまで議席を持たなかったDUPが前回より16.6%得票率を伸ばし、2議席を獲得した。さらに、UKUPも候補者を擁立した選挙区の中で最も多くの得票を得て、1議席を純増させたのである。また、APNIも前回より5.8%得票率を下げたものの、アイリーン・ベルがGreenのジョン・バリー、NIWCのジョン・モリス、そして無所属のプライアン・ウィルソンとSDLPのリアム・ローガンの移譲票を受けて、第13回集計で再選を果たしている。

とくに、UUPは、同党公認候補以外のユニオニストないしはコミュニティ横断的政党から第2位順位票の移譲をほとんど期待できないという状況の中での選挙となっていた。

この選挙区は、カトリック系住民が9.20%と18選挙区中2番目に少ない地域であり、逆に65.79%がプロテスタント系住民で占められていた。また、コミュニティを基礎にした支持票の組織状況でも、カトリック系が11.68%しか組織できていなかったのに対して、プロテスタント系は81.63%を組織していた。とくに、自由プロビテリアン教会の影響力の強いコミュニティを中心に票の取り纏めが進められたことも、DUPにとって有利に働いたと言えよう。

[南ダウン選挙区]

南ダウン選挙区は、北アイルランドの南東部に位置する田園地帯であり、ダウン・ディストリクト・カウンシル、ニューリー/モーン・ディストリクト・カウンシルの東部地区、バンブリッジ・ディストリクト・カウンシルの一部を含む地域である。この選挙区は、1987年以来、

SDLPのタディー・マクグラディが英国下院の議席を守っている。ここも、1995年の選挙区の区割り改定で、UUP支持者の多かったドロモアがラガン・パレー選挙区に、シャインフィールドがストレンジフォード選挙区に組換えられたことにより、UUPの影響力が弱体化したと言われている。

また、この選挙区は、カトリック系住民が61.99%を占め、これに対してプロテスタント系住民は27.31%を占めるにとどまっていた。そして、今次の選挙で、コミュニティを基礎にした支持票の組織状況を見ると、カトリック系が66.34%、プロテスタント系は31.82%を組織していた。

今回の選挙では、SDLPが35.1%を獲得し、2議席を獲得したが、前回選挙より10.2%も得票率を下げ、現有3議席を守れなかった。また、SFは逆に11.4%得票率を伸ばし、1議席増の2議席を獲得している。そして、DUP、UUPとも現有の1議席を守り、議席数上、「和平合意」支持派と反対派の勢力バランスに変化はなかった。しかし、今回は、第1位順位票において、DUPがSDLPに取って代わり第1党となり、また、UUPも第2党とナショナリスト系政党を押さえる結果となった。前回の地方議会選挙、2001年の英国総選挙および地方自治体選挙では、第1党にSDLP、第2党にSFという組み合わせであった。その意味では、「和平合意」反対の運動を強力に推し進めているDUPとこれに影響されて右旋回しつつあるUUPに支持が集まったことは、今後の「和平合意」修正論議に影響を与えるものと考えられている。

[ストレンジフォード選挙区]

この選挙区は、アード・ディストリクト・カウンシルの大部分とキャッスルレー・ティストリクト・カウンシルの一部、ダウン・ティストリクト・カウンシルのシャインフィールド地区を含んでおり、カトリック系住民が13.10%、プロテスタント系住民が67.00%と圧倒的にプロテスタント系住民が多数派を占める地域である。とくに、プロスピテリアン教会に所属する住民が35.44%と18選挙区の中で2番目に高い割合を示していた。今次選挙のコミュニティを基礎にした支持票の組織状況を見ると、カトリック系が15.37%、プロテスタント系は79.99%を組織していたと考えられている。

また、この選挙区は、1983年以降、UUPの副党首でもあるジョン・テラーが英国下院の議席を守ってきたが、2001年の総選挙で、DUPのアイリス・ロビンソンがUUP候補を破って当選している。

今回の選挙では、DUPは第1位順位票で当選したアイリス・ロビンソンをはじめ1議席増の3議席を獲得した。しかも、3議席とも、第2回集計までで確定するという圧倒的な集票力を発揮した。一方、UUPは第1位順位票でキルクローニー卿が当選を果たしたが、2議席目は第10回集計で確定するという厳しい選挙であった。また、APNIのカーラン・マクカーシーが第11回集計で滑り込み、ナショナリスト系政党は今回も議席を獲得することができなかった

のである。ここでも、自由プロスピテリアン教会の影響下にあるプロテスタント系コミュニティの力が十分に発揮され、DUPの安定的な得票につながったといえる。

[アッパー・バン選挙区]

この選挙区は、クレイガボン・ティストリクト・カウンシル、バンブリッジ・ティストリクト・カンウシルの大部分を含んでおり、カトリック系住民が39.77%、プロテスタント系住民が47.74%と両派比率が拮抗しつつある地域である。また、今次選挙に見られるコミュニティを基礎にした支持票の組織状況では、カトリック系が42.87%、プロテスタント系は54.67%を組織していた。このようにプロテスタント系の優位のもとで、UUP党首デビッド・トリンプルとDUPの指導的幹部の一人であるデビット・トンプソンの地盤となる選挙区である。

今回の選挙では、UUPが得票率を微増させ、2議席の現有議席を維持したが、DUPは前回から13.0%も得票率を伸ばし、1議席増の2議席を獲得している。そして、ナショナリスト系政党として、SFとSDLPがそれぞれ1議席を獲得している。

この選挙での特徴は、UUPとDUPとの力関係が逆転しないまでも、著しく接近したことである。これまで、UUPは、22.10%の住民が所属しUUPの支持母体でもあるアイルランド教会と、13.71%の住民に影響力を持つとされDUPが支持母体する自由プロスピテリアン教会との力関係を背景に、安定した選挙戦を闘っていた。しかし、今回の選挙では、党首のトリンプルが3,000票近く票を減らす一方で、DUPのトンプソンが前回選挙で最高得票をしたDUP候補者より1,700票あまり得票を増やしている。また、DUPの得票のうち純増分は前回選挙でユニオニスト系諸派から立候補し当選したデニス・ワトソン 今回の選挙では、DUPから立候補し落選 の票を獲得できたことによるものである。このように、UUPの基礎票が一部DUPに流れ、UUPはSDLPが前回選挙より8.0%得票率を下げることにより、SDLPの基礎票をSFと分け合うことで、勢力の維持を図ることができたと考えられるのである。

[西ティーロン選挙区]

この選挙区は、1998年に爆弾テロ事件が発生したオマー・シティーを含むストラボーンとオマーの2つのディストリクト・カウンシルから構成されている。ここは、カトリック系住民が64.21%、プロテスタント系住民が28.34%と圧倒的にカトリック系住民の比率が高い地域でもある。また、今回の選挙では、コミュニティを基礎にした支持票の組織状況は、カトリック系が67.79%、プロテスタント系は31.26%を組織していた。

西ティーロン選挙区では、2001年の英国総選挙でSFのハッド・ドーティがUUPのウイリアム・トンプソンを破り当選するなど、安定的に30%以上得票率を上げている。

しかし今回の選挙では、オマーで病院の存続運動を展開してきた医師のカーラン・ティーニーが無所属で立候補し、第1位順位票の最高得票で当選を果たすなど、他の選挙区のように、ユニオニスト政党かナヨシナリスト政党か、または「和平合意」支持派か反対派かが対立軸と

なる選挙とは異なる状況が見られた。結果としては、SFが現有2議席を守り、第1党の地位を確保したが、SDLPは11.1%も得票率を減らし、1議席を確保するにとどまった。そして、UUPとDUPはそれぞれ現有1議席を維持することとなった。この結果からして、むしろ草の根的な住民生活に関わる課題を重視した投票行動が見られ、このことは「和平合意」に対する期待感の弱まりを示すものと考えられている。

[4] 選挙結果の特徴

以上、第2回北アイルランド地方議会選挙における18選挙区の動向をまとめてみた。ここから今回の選挙での特徴をまとめてみよう。まず、第1に、DUPが総得票率で第1党になった選挙区は18選挙区中、7選挙区であり、UUPは4選挙区、SFは5選挙区、SDLPは2選挙区であった。注目すべきなのは、第1位順位票の集計で第1位となった候補者の数である。この点について見ると、DUPが18選挙区中、8選挙区であり、UUPは6選挙区、SFは2選挙区、SDLPは1選挙区であった。18選挙区中、8選挙区で「和平合意」反対派の候補者が第1位となっている。なお、UUPに所属する「和平合意」反対派分子で、ジェフリー・ドナルドソンが1位で当選しているので、実際は、9選挙区で「和平合意」反対派の候補者が第1位順位票で第1位になっている。これに対して、「和平合意」支持派候補は、8選挙区を占めたことになる。つまり、半数の選挙区で、「和平合意」反対の候補が第1位となっているのである。

また、これをカトリックとプロテスタントの両宗派人口の分布と重ね合わせると、政党得票率では、東ロンドンデリー、アントリム南、アッパー・パン、南ティーロンより以东（13選挙区）の北アイルランドはユニオニスト政党が第1党となっており、しかもそのうち8選挙区が「和平合意」反対派の政党であった。さらに、第1位順位票の第1位候補者で見ると、ミッド・アルスター以东の選挙区（14選挙区）がベルファスト西選挙区をのぞいて、ユニオニストの候補者によって占められることになる。そして、その13選挙区のうち9選挙区が「和平合意」反対の候補者で占められていた。他方で、ミッド・アルスター以西の6選挙区でカトリック系コミュニティを背景にしたナショナリスト政党が第1党となっているのである。つまり、このことは、今回の選挙を通じて、カトリック系およびプロテスタント系住民の分布をそのまま反映して、北アイルランドを東西に分断する形の政治地図が描かれることになったのである¹⁵⁾。

第2に、北アイルランド地方議会選挙が単記移譲式比例代表制をより選挙であった点を考慮すると、各政党の移譲票の動向に注目する必要がある。1998年の地方議会選挙において、主要政党が獲得した移譲票について見てみると、同じ党から立候補した候補者から受けた移譲票は、

UUPが71%、DUPが72%、SDLPが70.5%、SFが87%であった。しかし、2003年の第2回地方議会選挙について、概算ではあるが移譲動向を見てみると、UUP、DUP、SDLP、SFの主要4政党に関して言えば、前職候補者を立候補させている場合、80~90%が同じ政党候補者間で移譲が行われているのである¹⁶⁾。

また、IC Northern Ireland.co.ukのデータによると、今回の選挙では、移譲集計が行われた回数は約160回にのぼる。そのうち他の政党への移譲は60回程度であった。DUPから他党へ移譲された票のうち、平均してほぼ37.5%がUUPに移譲されたと考えられている。また、SDLPからの移譲票は平均で、SFに42%、APNIに23.5%、UUPに15.6%であったと考えられている。SFからの移譲票はほぼSDLPに集中しており、東ロンドンデリーの98.5%を最高に、平均では83.4%であった。UUPに対してはわずか1%弱という数字であった。

こうした票の流れから見て、今回の選挙は各政党が持つカトリック系およびプロテスタント系の両派コミュニティに対する組織力を背景にしたものであり、コミュニティ間の対立関係を剥き出しにする形を示したということである。それゆえ、「和平合意」支持か反対かという政策的争点に収斂した選挙という性格を弱め、むしろカトリックかプロテスタントかという選択肢の中で闘われた選挙ということができよう¹⁷⁾。

問題は、ユニオニスト全体の中で、「和平合意」支持派であるUUPがユニオニスト第1党から後退し、ユニオニストの中でも最も強硬な部分として知られ、アルスター義勇軍などの武装組織との関係を持つ「和平合意」反対派のDUPがユニオニスト第1党になったことである。しかも、30議席を獲得したことは、地方政府の組閣に大きな影響を持っていた。他方で、UUPから立候補して当選したシェフリー・ドナルドソン（ラガンバレー選挙区）、アーレン・フォスター（ファーマナー/南ティーン選挙区）、ノラ・ベアー（ラガンバレー選挙区）の三人は、UUP執行部（デビット・トリンプル派）と対立関係にあり、「和平合意」反対の姿勢を強く示していた。その意味で、UUPが獲得した27議席のうち、「和平合意」支持の党議決定に従うものと見られる議員は24人ということになる。12月18日のBBCニュースでは、シェフリー・ドナルドソンは他の2人とともに、UUPを離党し、以前より要請のあったDUPへの入党を示唆する発言を行っている¹⁸⁾。その場合、DUPは33議席を有する地方議会最大会派となる。

もう一つの点は、カトリック系諸政党の中で、SFが24議席を獲得し、カトリック系政党第1党として安定的な地位を獲得したことである。これには、結党以来の指導者であるジョン・ヒュームの事実上の引退やシーマス・マローンが地方議会選挙への出馬を断念したことなど、知名度で両者を下回るマーク・ダーカンが党首に就任して以来、社会民主労働党の政治的影響力の衰退が顕著に表れたことが作用していた。

このことは、今回の地方選挙実施にあたっての下交渉の過程においても劇的な形で現れてい

た。それは、10月中旬、北アイルランド政府の再開と地方議会選挙の実施を向けたぎりぎりの交渉が英国首相官邸で行われた。その交渉の場に、社会民主労働党の代表者は招請されなかったのである。そこには、英国、アイルランド共和国両政府とUUP、そしてカトリック系諸政党を代表して交渉にあたったのがほかでもないSFであった¹⁹⁾。

つまり、UUPおよびSDLPの穏健派の後退とともに、DUPとSFが躍進したことは、北アイルランドにおいて最も非妥協的な政党がUUPとSDLPの間でスケープボード握る立場から、ナショナリストとユニオニストの両勢力をそれぞれ代表する立場を獲得したことを意味している。つまり、今回の選挙が、本来「和平合意」が追求していたコミュニティ横断的な行政単位の構築という方向にではなく、地方議会の中にコミュニティ間対立を投影する効果をもたらしてしまったことを意味しているのである。

[5] 地方政府再開への課題

今回の地方議会選挙の結果について、英国の有力紙ガーディアンは「悪夢のシナリオ」²⁰⁾と評した。その理由は、地方議会内での「和平合意」支持派と反対派という枠組みでの勢力バランスではなく、両派を構成するカトリック系とプロテスタント系諸政党の勢力バランスの問題にあった。それは、和平合意が示した地方政府構築のための制度上の問題とも密接に関係していた。

今回の選挙結果を受けて、北アイルランド地方政府の編成が開始されるはずであった。しかし、地方政府再開に向けたプロセスは、12月段階にあってまったく進んでいない。それは、ナショナリストとユニオニストを代表する政党が「和平合意」に対する評価をまったく異にしているからであるが、なぜそのことが重要な障害となるのかが問題である。

「1998年和平合意」は、新たに成立される北アイルランド地方政府に対して、英国北アイルランド相および英国議会と調整しつつ、経済開発、教育、厚生、社会福祉事業、農政、環境、財政に関して、「和平合意」で確認された内容を具体化する機能を持たせることを意図していた。そして、北アイルランドにおける各政治勢力の合意と協調をもとに、行政を担う権力分有型の統治方法を導入しようとしたのである。

そこで、地方政府の編成の仕組みが問題となる。まず、「1998年和平合意」と「1998年北アイルランド法」は、地方議会メンバーについて、それぞれの会派は「ナショナリスト」、「ユニオニスト」、「その他」の三つのカテゴリーのいずれかに所属することを表明することを求めた。そして、地方議会における議決にあたって、日常的には多数決方式を採用するとしつつも、重要な議案については、とくに両コミュニティに利害の対立が見られるような議案の場合には、2つのルールが採用されたのである。第1が、「並行合意方式」(Parallel consent procedure)

である。この方式は(1)議会全体の相対的多数,(2)ユニオニストおよびナショナリスト双方の相対的多数を必要とするものであった。この場合,2003年の地方議会選挙の結果からすると,ナショナリストとして登録されるであろう人数を42名と仮定すると,その過半数は23名となる。また,ユニオニストとして登録されるであろう人数を59名とすると,その過半数として30名が必要となる。第2のルールは,「過重多数決方式」(Weighted majority)である。この方式は,議決にあたって,出席した議会メンバーの60%の賛成を必要とし,その内訳として,ナショナリストおよびユニオニストの双方がそれぞれ40%以上の賛成票を投じていることが必要であった。つまり,議会メンバー全員が採決に参加したとして,まず65名の賛成が必要であり,その内訳として,ナショナリストが17名,ユニオニストは24名の賛成を含んでいなければならないのである。たとえば,ナショナリスト全員(42名)が賛成したとしても,議決には,ユニオニストから24名の賛成が得られなければ,議会全体で65名の賛成が得られたとしても,否決されることになるのである。

また,少数派条項として,相対多数決による議決がなされるような一般的な議案についても,30名の動議により,上記の特別採決方式が採用されることになる。

次に,地方政府の第1首相および第2首相の選出にあたっては,ユニオニストとナショナリストから構成されなければならないとされ,議会により第1首相と第2首相はセットで指名され,信任投票にかけられることになる。この場合の議決方法は,上記の第1の方法が採用されている²¹⁾。

(表4)想定されるカテゴリー別議席数〔2003年第2回地方議会選挙結果より〕

カテゴリー	政 党 名		議 席 数
ユニオニスト	民主ユニオニスト党	DUP	30
	アルスターユニオニスト党	UUP	27
	連合王国ユニオニスト党	UKUP	1
	進歩的ユニオニスト党	PUP	1
	小 計		59
ナショナリスト	シン・フェイン党	SF	24
	社会民主労働党	SDLP	18
	小 計		42
そ の 他	連 合 党	APNI	6
	無 所 属	Ind.	1
	小 計		7

(備考) The Electoral Commission web-site, Election data, Northern Ireland Assembly elections - results 発表の議席数から試算。

ここで、今回の地方議会選挙の結果、どのような問題が生ずるのか見てみよう。

第1に、議決について、「並行合意方式」による採決が行われた場合、ユニオニストは自らの陣営において、30名の賛成を取り付けなければならない。そうすると、今回の選挙結果からすると、DUPは30議席を獲得しているがゆえに、同じユニオニストの他の政党との調整を行う必要がない。つまり、そのことは、「和平合意」支持派ユニオニストの意思を確認する必要がなく、党の方針にそった決定をユニオニスト全体の意思として、議会に反映させることができる。これは、1998年の場合とは、大きく異なる。なぜならば、前回の選挙結果からすると、UUPは28議席であり、他のユニオニスト政党との間で多数派工作を行う必要があった。ここに、「和平合意」が意図したエリート間の協調と妥協が成立する可能性があったからである。それゆえ、ユニオニスト系小政党が意思決定に参加する可能性が残されていた。また、その他のカテゴリーに登録している「和平合意」支持派政党からの支援を引き出す可能性も残されていた。事実、APNIの議員3名がユニオニストとして登録し直し、反対派に対抗するという局面も見られたのである。しかし、今回の選挙結果からすると、そうした可能性は閉ざされているように思われる。さらに、UUPから離脱し、DUPへの参加を模索しているドナルドソンら3名のユニオニストが、DUPに所属した場合、DUPは安定的な多数派をユニオニスト内に構築することになるのである。

第2に、第1首相および第2首相の選出にあたって、ナショナリストとユニオニスト双方から第1首相もしくは第2首相のいずれかを選出しなければならないことから、今回の選挙結果からすると、ユニオニストを代表してDUP党首のイアン・ペイズリー師が指名されることになる。また、ナショナリストについては、これを代表してSFのジェリー・アダムズ党首が指名されることになる可能性が高い。しかし、この2人について、「並行合意方式」による信任投票が行われた場合、ユニオニスト、とくにDUPは30議席すべての議員がアダムズに不信任の投票をすることが予想される。また、SFもDUPのペイズリー師に対して不信任の投票をすることになる。そうすると、ユニオニストはたとえ59名がペイズリー師に信任の投票をしたとしても、24議席を持っているSFが不信任すれば、この組み合わせの第1首相と第2首相の選出はできないことになる。

こうした意味で、DUPの30議席とSFの24議席は地方政府編成にあたって、重たい意味を持つことになるのである。つまり、このことは、「和平合意」が意図したエリート間の協調と妥協²²⁾に基づいた統治という枠組みは成り立たないということの意味しているのである。

[6] まとめに代えて

以上、2003年11月26日に実施された第2回北アイルランド地方議会選挙について、その概要と課題を検討した。ここから言えることは、「和平合意」の完全実施を求めるSFとこれに一貫して反対してきたDUPとの対立が、北アイルランドにおける政治闘争の局面において、主たる対立軸として表面することとなった。そして、カトリック系およびプロテスタント系のコミュニティを地域的に分断するような政治地図が描かれることにより、両派の対立構造がより明確なものになったということである。このことは、IRAへの武装解除要求が強まる一方で、プロテスタント系ロイヤリストによる暴力が激化している情勢の中で、新たな武力闘争への可能性すら秘めていると思われる。

それゆえ、2002年10月以降、暗礁に乗り上げた「和平合意」は、今回の選挙を通じて、さらにその危機を深めその存在意義すら脅かされかねない状況におかれることになったと言えよう。

注

- 1) Agreement reached in the multi-party negotiations, H.M.S.O, 1998, pp. 1-3.
- 2) The Electoral Commission for Northern Ireland, "Autume Assembly Election 2003", October 23, 2003, Belfast. (<http://www.electoralofficeni.gov.uk/press/documents/PressReleaseandTimetable.pdf>) [2003年10月27日]
- 3) Gerry Adams on Key Peace Process Address, October 21, 2003. from Sinn Fein Home Page (<http://www.sinnfein.ie/>) [2003年10月22日]
- 4) IRA statement on arms, October 21, 2003, IRA statement on deal collapse, October 28, 2003. from Sinn Fein Home Page (<http://www.sinnfein.ie/>) [2003年10月22日, 29日]
- 5) P. J. Emerson, *Beyond the Tyranny of the Majority: Voting Methodologies in Decision-making and Electoral System*, Belfast, 1998, pp. 2-4, 41-42, 70-73. Paul Mitchell, Rick Wilford (eds.), *Politics in Northern Ireland*, Oxford, 1999, pp.67-68.
- 6) 単記移譲式比例代表制の選挙システムについては、拙稿「1998年北アイルランド地方議会選挙の構造」(『立命館法学』第274号, 2000年)を参照。
- 7) Electoral Commission, *The Electoral Commission Northern Ireland Desk Research-Final Report*, July, 2003, London, pp.1-3, 8-12, 33-38.
- 8) Electoral Commission, *The Electoral Fraud (Northern Ireland) Act 2002: Public Opinion Research*, May, 2003, pp.39-44.
- 9) Electoral Office for Northern Ireland Web-site, "Frequently Asked Questions - Electoral Identity Cards," December, 2003, (<http://www.electoralofficeni.gov.uk/faq/idcards.asp>) [2003

年11月30日）を参照。

- 10) Irish Politics Studies, *Data Year Book 2002*, pp.95.
- 11) *ibid.*, p.96.
- 12) 南野, 前掲論文, 289-294ページ。
- 13) Feargal Cochrane, “The 2001 Westminster Election in Northern Ireland,” *Irish Politics Studies*, Vol.16, 2001, pp.185-188.
- 14) 本章の各選挙区の状況については, Simon Henig, Lewis Baston (eds.), *The Political Map of Britain*, Politico’s Publisher, London, 2002, pp.969-994. この他に, ARK Social & Political Archive; Northern Ireland Elections, 2003 Assembly elections with the support of The Electoral Commission (<http://www.ark.ac.uk/elections/>) [2003年12月15日], Guardian Unlimited; Special Report, Northern Ireland (http://www.guardian.co.uk/Northern_Ireland/) [2003年12月15日], Ulster University; CAIN Web Service (<http://cain.ulst.ac.uk/>) [2003年12月15日] を参考にした。
- 15) 北アイルランドにおけるカトリック系とプロテスタント系住民の分布と構成比率については, 拙稿「北アイルランド紛争における政治的暴力の構造1968 - 1993年」(龍谷大学 『社会科学研究年報』 第31号, 2001年, 204-208ページ) を参照のこと。
- 16) Sydney Elliott, “The Referendum and Assembly Elections in Northern Ireland,” *Irish Politics Studies*, Vol. 14, 1999, pp.148-149.
- 17) Newsletter, Belfast News, Derry Journal で構成する IC Northern Ireland.co.uk のホームページに掲載された *2003 Assembly Election Result* のデータをもとに試算した。(<http://icnorthernireland.icnetwork.co.uk/election03/>) [2003年12月20日]
- 18) *The Guardian*, December 2, 2003.
- 19) *BBC News*, 18 December, 2003, (http://news.bbc.co.uk/1/hi/northern_ireland/3331805.stm) [2003年10月25日]。
- 20) *The Guardian*, December 1, 2003.
- 21) Brendan O’Leary, “The 1998 British-Irish Agreement: Power-Sharing Plus,” *Scottish Affairs*, No. 26, Winter, 1999, pp.29-35.
- 22) *Ibid.*, pp.14-15.

(平成14年度文部科学省科学研究費補助金の交付による研究成果である)

The Nature of the 2003 Northern Ireland Assembly Election

The assembly election held in Northern Ireland on 26 November 2003 marked the crisis of the Belfast Agreement of 1998. It was characterized by the triumph of the Democratic Unionist party that was a hard-line anti-agreement party and of Sinn Fein that was a hard-line republican party in favour of the Belfast agreement. It is seemed that the result of this election reflected a communal conflict between Protestant and Catholic in Northern Ireland and geographically divided Northern Ireland into two parts between Protestant/Unionist people's area and Catholic/Nationalist people's area. The purpose of this article is to survey the tendency of the 2003 assembly election and explore difficulties in re-opening the Northern Ireland government and assembly.

(MINAMINO, Yasuyoshi 本学部助教授)